

L18c 主要流星群による流星痕の、出現高度の比較

比嘉 義裕 (日本流星研究会)、戸田 雅之 (日本流星研究会)、山本 真行 (高知工科大学 電子・光システム工学科)

流星痕(りゅうせいこん)は、流星出現後にその軌跡に発生する発光分子雲である。我々流星痕同時観測キャンペーン事務局は、しし座流星群の大出現が予想された1998年より、流星痕の性状解明を主目的とし、観測・データ収集・研究をおこなってきた。初期の観測対象は、出現頻度が年間数例である大火球に伴う「永続流星痕」だけであった。近年、視認できないほどに淡く発光する「見えない流星痕 invisible train」の存在が見出された。「見えない流星痕 invisible train」は、明るい流星が出現したら、流星痕が視認できなくても、その飛跡を撮影することにより、捉えることができる。流星痕の出現高度について、我々はまず、主に2001年しし座流星群にて得られた大量の永続流星痕の多地点同時観測を用いて検出をおこない(Masa-yuki Yamamoto, et al., Earth, Moon, Planets, 95, 279-287, 2005)、さらに「見えない流星痕 invisible train」の観測により主要流星群において比較検討をした(比嘉 他, 日本天文学会2008年春季年会)。また、「永続流星痕」に先だって出現する「短痕」の出現高度についての検証もおこなっている(戸田 他, 2008 AOGS, 釜山)。本講演では、本年度に得られた流星痕の情報を追加し、出現高度について精査を進める。